
箱庭学園の裏切り者

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭学園の裏切り者

【Nコード】

N1827BA

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

善吉のしたとある一つの相談から生徒会は開いてはならない箱を開けてしまった
アウトキャスト
生徒会VS新クラス…不仲!!!!

登場人物紹介（前書き）

内容に関わります

登場人物紹介

ひめかわ
姫川

あやめ

クラス：1年1組

アウトキャスト

不仲

メモリーハッカー
スキル：記憶欲

膝まである長い黒髪に無改造の制服。

冥利のように低い背が特徴。

他人を下の名前で呼ぶ。

みょうこう
妙高 涙

クラス：3年マイナス13組

アウトキャスト

不仲

リアルクロス
スキル：変改突破

箱庭学園の夏服を着ている。

他人をフルネームで呼ぶ。

こやす やすみ
子安 休

クラス：2年13組

アウトキャスト

不仲

ギャップ
スキル：外見反問

前髪をかきあげてカチューシャで止めている。

短いスカートのセーラー服にスパッツ。

目つきが悪い。

圭吾。

かもしま ねぐら
鴨島 埴

クラス：3年11組 アウトキャスト
不仲

キッズアイランド
スキル：夕焼け子焼け

緑色のチエックパジャマに茶髪のツインテール。

元気で小さい子供に見えるが一応飛び級なしの高3。

かなやさん しへたか
金谷山 標高

アウトキャスト
クラス：2年1組 不仲

キラ・キラ
スキル：標殺

ダブダブの学ランに金髪よりの茶髪。

埴同様、小さいが飛び級ではない。

第一箱 「宜しくね」(前書き)

半ジャンプコミックス派ですので、色々なあなあです。

第一箱 「宜しくね」

安心院なじみとの戦いも終わって、学園…いや、生徒会にもやつと平和が訪れた。

* *

「なあ、めだかちゃん」

「何だ？」

「俺のクラスの奴のことなんだけどよ……」

「ふむ、成程」

善吉が話した内容は…

自分のクラスで出席率が悪く一度も顔を合わせていない奴がいる、という非常に簡単な話だった。

「それは…投書：もしくは相談に含めるが、よいな？」

「ああ、構わねえ」

「では…目安箱に基づき 生徒会を執行する！」

久々の投書が、事件を引き起こす鍵となることは、彼らはまだ知らない。

* *

「…………で」

「ん？」

「なんで俺らも居ねえといけねえの!？」

「私はあまり知り合いでもないのな」

「俺もだよ！相談聞いてた！？」

と言う訳で、生徒会5人が1年1組に集まっているわけだ。
時間は3時50分。

「4時に来るように言ってる」

「ツカ！なんか言わなきゃよかったぜ」

「否！言わねばならぬのだ！貴様のクラスメイトの事情は私の事情だ！」

凜として言う。

55分になった頃、教室のドアが開いた。 “例の人物” がやって来たのだ。

だらしなく長々と伸びた黒髪に、いじっていない制服。
なにより、冥利のように低い背が目立つ子だった。

「私、何か悪いことしたあ？」

「いや、投書があつてな。出席が悪いとのことだ」

「そっかあ」

取り出したピンで前髪をパチンと止めた。

そして、膝より下にある残りの髪をポニーテールにまとめた。

「私の名前は知ってるかな。めだか会長」

「ああ、知っておる……………あれ？」

「忘れてる ねえ？じゃ、改めて」

ニヤリと不気味に笑う。

「私は姫川あやめ。宜しくね」

「…ふむ、姫川同級生か」

「どうせ、“また忘れちゃうよ”」

「……………は？」

「いやっ 何でも無いよ。 ま、精々心ゆくまで “生徒会”」

を楽しんでね」

くるり、とめだかたちに背を向けて歩きだす。

めだかは彼女を追うように言った。

「…どういう意味だ？ 姫川同級生」

あやめは、めだかの方へは向かず、背を向けたまま言う。

「どーいうつもりも意味もないよ。めだか会長」

こんどは、きちんとめだかを見た。

「私は君たちと敵対するつもりだけど戦う気もない。

私は君たちと仲良くしたいけど友達なんてゴメンさ。

ゆっくり、ゆっくりね。最終回を待つよ。

…っと、口が滑ったみたい。忘れてね」

* *

「…全く、なんだったのだ？」

「今までの敵とはなんかちげーよな」

「うんうん、だよな。僕も思う」

「「「!?!?!」」」

振り向くと、入口にいたのは安心院なじみ。

「そんな馬鹿な君たちに、僕からいくつか助言をしよう」

椅子に座って、どうせ長居する気なんだろう。

「彼女はね

ノーマル

“普通でもなく、特別でもなく、異常じゃなけりゃ、スペシャル過負荷でも

ないんだよ。

ノットイコール”

勿論、悪平等でも、ない。

そう、彼女はね。

アウトキャスト
『不仲』

なのさ」

「アウトキャスト
…あ…不仲？」

「そ。仲間になれない仲間外れの能力者たちさ」
「ずず、と用意されたお茶をすする。

お茶を机に置いて、話を再開した。

「努力をしても報われない過負荷マイナスのように、
だがしかし 才能に優れた異常アブノーマルのように、

能力に長けた 特別スペシャルのように、
だけど、普通ノーマルでもあるし 悪平等ノットイコールでもあるのさ」

「…いまいちな。つまり？」

「彼女はね、全てのクラスに所属できる…不仲というより、裏切り者だね」

第一箱 「宜しくね」(後書き)

お久しぶりでございます！

「ノーマルによるスペシャルの為のアップノーマルなマイナス」もしくは

「SOS団 IN 箱庭学園」 以来です！

確実ではありませんが、あの頃より多分能力上がってますんで宜しくお願いします！！

再開して面倒だと思ったのはルビです！ひどいすぎますね！！この作品の！

第二箱 「俺は悪くない」

生徒会のメンバーが不仲の^{アウトキャスト}ことを知ってから数日。
メンバーたちは会議を開いていた。

「……と言っ訳で最近周りに変化はあつたか？」
役員に問うめだか。

「…変化？うーん、転校生…かな」
「転校生だと？」

「？ うん。僕のクラスにね」
変化は、事は、早く進みすぎていた。

＊ ＊

ということで、球磨川は「転校生と接する」というミッションを
課せられた。

「……やっぱりめだかちゃん、まだ少し厳しいな」
と、ぼやきつつも扉を開けた。

誰もいない教室。一箇所だけ、開いている窓。

「あれ？」

「ちやーん」

ブチン、と。肉が切れる音がした。

＊ ＊

「球磨川…遅くねえか？」

「まあ…確かに遅いな…」

生徒会室で副会長くまがわの帰りを待つ4人。

そんな時、外でドサッと何かが倒れる音がした。

「？　なんだろ…」

気になったもがなが、廊下へ出たのだが…

「み…楔ちゃああああん!？」

という悲鳴に残り3人も駆けつけた。

そこに居たのは、血みどろになり倒れていた…球磨川だった。

こうなつたのも、ほんの少し前。

彼が扉を開け、教室に入ろうとしたとき。背後から“何かを巻かれた”。

“何か”とは、殺人で良く用いられる…ピアノ線だった。
首に巻き付けられ…気づいた頃には
ブツリ

と。肉の切れる音。だが。

「ちやーん　…つてあれ？」

『…ギリギリ…大嘘憑オールフイクションきが間に合ったね…』

“切られなかった”ことにした…らしい。

「まーいーや。バレたのは同じだしー。」

あ、俺の名前ぐらい知ってるよね？　球磨川楔クラスメイト

『…知ってるさ、妙高みょうこう　涙ちゃん…だよね』

「大正解！ボーナスポイント死よんポイントゲット！」

ピアノ線をポケットにしまって、球磨川へ飛びかかる涙。そこへ躊躇なく、螺子を投げる球磨川。

涙はよける暇もなく、螺子は呆気なくクリーンヒットした。

「……って……いったーい……」

両膝について倒れる涙。 球磨川の手は、止まっていた。

「な ん て な」

『が……ふ……！？』

今度膝をついたのは、一撃も攻撃を食らっていない球磨川だった。
当の涙は、パツパと器用に手でホコリを払い立ち上がった。

「俺たち不仲は、
アウトキャスト
アノーマルスペシャル マイナス ノーマル
異常で特別で過負荷で普通な人間なんだぜ？ 何安心してんだ

よ」

『あー……言ってたね……そういえば……』

「そうぞ。言われてたから……“俺は悪くない”」

『……………』

「んじゃま、おやすみん」

……………という内容を、彼は伝えてくれた。
くまがわ

「すまなかつたな……」

「別に……舐めてかかった僕が悪いわけだから」

場所は保健室。 一時的避難だ。

「貴様たちも……気をつけておけよ……特に、転校生にはな」

もがなたちに言うめだか。 これから……彼らには大きな試練が増
えていく。

＊ ＊

「はいはい、こんちわー。」

一年にして生意気にリーダーしまーす、姫川あやめちゃんです。
いえーい」

ものすごく低いテンション（+棒読み）で言うあやめ。

「第一計画、「球磨川楔をツブす」じゃなかった「ご挨拶」はど
ーだった？」

「完璧じゃない？俺的にはね。ま、そんな傷もなかったことにな

ったんだろっね」

オールマイクシヨン
「「大嘘憑き」が邪魔ですね」

あやめは、発言した目つきの悪い長髪の彼女の方へ向いた。

「そうだね、休さん」

発言した女子は、子安 休。
2年13組に転入してきたのだ。

前髪をかきあげてカチューシャで止めた髪型と、スカートの短い
セーラー服にスパッツという服装。

「ところで、あやめさんの“能力”で“記憶”することは？」

「うん、一応したよ。ありゃー凄いね」

「……ほう……」

「楔副会長は、私的に一番嫌いで一番好きな敵かな」

第三箱 「そろそろ」

アウトキャスト
不仲。

普通なのに 異常おかしくて。

普通なのに 特別で。

普通なのに 過負荷ひねくれでて。

だけど、皆 悪平等おんなじで。

どこにも所属しない故に、全てに所属する彼らは。
仲が良くないというよりも、仲間外れの裏切り者。

* *

球磨川アウトキャストが不仲にやられた当日。

この学校に何人転校してきたのが少しだが、分かった。 元々い
たあやめ、マイナス十三組には涙、十三組には休。 そして、
更に考えた結果、

“全てのクラスに入れるのなら、特別スペシャルのところにも居る”

ということにたどり着いた。 …だが。

「黒神さん、私のクラスに転校生なんていないよ?」

「俺もです」

そして三年にも、不在。

「ということだ? 三人で私たちに挑む気か?」

『もう少し不真面目に考えるんだよ、めだかちゃん』

「だ、だが………」

『相手は、過負荷ぼくたちでもあるんだからね』

「……………」

だから、“どのタイプ”にも対応できるように、考えないとダメなんだ。

一番面倒で大変で、最も強い。

「…意見なんだけど、相手の能力が変だと思うの」と、もがな。確かに言われてみれば変だ。

「あの黒神さんが名前を忘れてるんだよ？おかしいよね」

何故あるとき、めだかは名を言えなかったのか。そして、オルフ大嘘憑きイクシヨンがあるはずの球磨川が何故負けたのか。

まあ、彼が勝つことは…あまりないのだが…。

「えーっと、姫川…だっけ」

「あ…ああ、姫川同級生、だ」

「なんか…“忘れる”って…日之影先輩みたいだよな」

「…確かに…な。だが、あそこまでオーバーでもないぞ」

“存在”は憶えているのに、“名前”だけ忘れていた。

「……謎が多いな」

＊ ＊

こんこん、と。 2年13組にノックの音が響く。

入ってきたのは

緑色のチェックパジャマに茶髪のツインテールの娘と、ダブダブの学ランを着た金髪よりの茶髪の子。

「やあ、やつと来たね」

と、迎えたのはあやめ。

「ハジメまして…、おぐ埒さん」

「はあーいっ こんちわ」

と、小さいパジャマっ娘・鴨島 埴が答える。

「こんにちは、標高くん」

「うん！よろしくね」

今度も小さい。学ランっ子・金谷山 標高が答えた。

「さて…揃ったかな」

「あやめさん、涙さんは？」

「ああ、安心して休さん。今着替えてるんだ。この学校の制服にね」

「そうですか」

あやめは、ニツと笑いこう言った。

「そろそろ、仕掛けますかね」

その仕掛けは、意外と早くに起きた。

「め…めだかちゃん！！！！と、投書が…」

「む？別になんともないではないか」

「ちげーんだよ！！その…不仲からなんだ！」
アウトキャスト

「な…に？」

内容は……

こんにちは。裏切り者です。

私たちは、第四体育館で観客を集めて待っています。

だった。

「……まずい！観客が……！！」

五人は、体育館へ急いだ。

第三箱 「そろそろ」(後書き)

【閑話】

オリキャラの名前は私の住んでいる地域からです。

そしてこの中のどれかが私の住んでいる団地の名前です(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827ba/>

箱庭学園の裏切り者

2012年1月8日21時51分発行